

台湾における老人の居住形態

都市と農村の比較 (その1)

鳥飼香代子・頼 蕙 芬*

The Old's Living Styles in Taiwan

Comparison between City and Country I

Kayoko TORIKAI and Huei-Fen LAI*

研究の目的

本研究は台湾（ここでは日本で一般的に使われる国名を使用することとする。）における老人の居住形態を事例的に把握・検討しようとするものである。台湾における老人の居住形態に関する調査や研究は、ほとんど行なわれていないようである。私達が入手した唯一の資料として、国の行政機関である「行政主計所」において毎年実施されている『台湾地区青少年及老人状況調査報告分析』¹⁾がある。そこに居住形態に関する簡単な調査がみられるのでそれを概観してみよう。調査項目は、1, 老人(65才以上)の居住形態に対する満足度, 2, 老人の健康状況と医療保険の状況, 3, 老人福祉とその利用実態, 4, 15才以上の人を対象とした老人福祉への希望であり、一応、老人の居住形態の把握が行なわれていることがわかる。だが、この調査の内容は表1のように、指標別の居住形態を把握したものであり、生活や住居の実態調査は行なわれていない。

さて、台湾の現在の居住形態を表1からみると子女と同居する場合が圧倒的に多いことがわかる。だが、日本の家族構成が高度成長により大きく変貌したことを考えると、急速な高度成長を遂げている台湾の現在の居住形態も近い将来、変化するのではないかと考えられる。では変化するとすれば、どのようなプロセスを経るのか、またその行きつく先、すなわち将来の居住形態はどのようなものになるのかというのが本研究の問題意識である。

本稿は、その第一歩として、老人の生活や住居の実態に注目し、その中に変化の芽や新しい居住形態に向けての生活のルール化がみられないかを検討しようとするものである。

なお、調査を行なうに当たって以下の手順を踏んだ。

まず、三世代同居の基盤となる住居の実態と住み方を把握する必要があると考え、1988年11月に台湾の古都である台南市でプレ調査を行なった。その結果を要約する。まず、住居は都市住宅と農

表1 台湾における老人の居住形態

(単位: %)

西暦別	計	独居	配偶者と同居	子どもと同居	親戚と同居	老人ホーム	その他
1986年12月	100.00	11.58	14.01	70.24	3.03	0.78	0.36
1987年12月	100.00	11.49	13.42	70.97	3.02	0.64	0.46

(『中華民國76年台湾地区青少年及老人状況調査報告分析』より)

* 熊本大学大学院教育学研究科教科教育専攻家政教育専修

村住宅に大きく分類でき、前者は2～4階建（1階は店、2階以上は住居）、後者は『三合院』²⁾の一部を一家族が使うという平屋建てが一般的であった。住み方は日本でいう完全同居³⁾⁴⁾⁵⁾が一般的であるが、一部にそれ以外の形態（日本でいう分居³⁾⁴⁾⁵⁾や別居³⁾⁴⁾⁵⁾が存在すること、そして、都市と周辺部で差がみられること、などが特徴であった。

そこで本調査は、住み方に的をしぼり、三世代同居（四世代同居も含める）の実態を把握すること、対象を都市と農村に分けて行なうこと、三世代同居に関する意見を聞くことの3つを留意点として実施した。

研究の方法

調査は住み方に的をしぼり、なるだけありのままの姿を把握するため、小学校高学年の生徒を対象としたアンケート方式とした。調査日は1989年9月3日から3日間である。調査対象は都市として台北県板橋市を、農村として同じく三峡鎮を選定した。具体的な調査対象校と数は、前者を板橋国民小学、4クラス198名、後者を民義国民小学、2クラス90名の合計288名である。調査は担任の先生が教室で説明し、クラス全員がその場で答えるという方法をとった。その中で44名の生徒が祖父母二人ともが亡くなっていることが判明したので有効調査対象数は244名である。しかし三世代同居に関する意見の設問は、全員の288名を対象とした。

アンケートの設問は大きく4つの部分に分けた。第1は、家族構成について、第2は、祖父母と一緒に住むことをどう思うか、第3は、将来生徒が結婚したとしたら老人と同居したいか、第4は、老人専用室と老人の生活はどのようなものか、である。なお、居住形態を(1)祖父母と一緒に住んでいる、(2)祖父母が近くに住んでいる、(3)祖父母がしばらく泊まってからおじやおば（すなわち両親のきょうだい）の家に行く、(4)祖父母が離れているところで親戚と一緒に暮らしている、(5)祖父母が離れているところで二人で暮らしている、の5つのタイプに分けた。そして実態に関して、(1)老人専用室の有無、設備、祖父母の職業、祖父母の仕事以外の時間の過ごし方、(2)祖父母の家まで歩いてかかる時間、祖父母が家に来る頻度、(3)祖父母の滞在期間、就寝場所、(4)祖父母の居住場所、一年に会う回数、また会う時、を聞いている。

なおその他に、調査対象地域の特徴と対象校の概略を知るために市役所と対象校の校長先生への簡単な聞きとり調査を行なった。

結果及び考察

表2 台湾における15才以上の年齢構成別人口 (単位：千人%)

年齢別	計		15才～24才		25才～49才		50才～64才		65才以上	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
1986年12月	13,308	100.00	3,439	25.84	6,658	50.03	2,180	16.38	1,031	7.75
1987年12月	13,549	100.00	3,388	25.01	6,861	50.64	2,217	16.36	1,083	7.99

(『中華民国76年台湾地区青少年及老人状況調査報告分析』より)

1. 調査対象地域の概要

調査対象地域の位置は図1のようになっている。両地域とも台北県に属する。なお台湾における15才以上の人口を表2に示す。台北県の位置は台湾の北部にあり、面積は約2052平方キロ、人口は約267万人である。全県は29の郷鎮市(村町市)を含み、70%の人口は「板橋」「三重」「新莊」などの市に集中している。台北県は台湾の首都である台北市の周辺を囲んでいるため、交通が便利で、就職・進学・進学の機会も多い。また、経済の高度成長下で、工場や会社が林立しており、台湾全土から大量の人口が流入している地域である。そのため人口増加率は非常に高く、台湾全土の中で最も高い地域である。さらに鉱山資源(鉄、

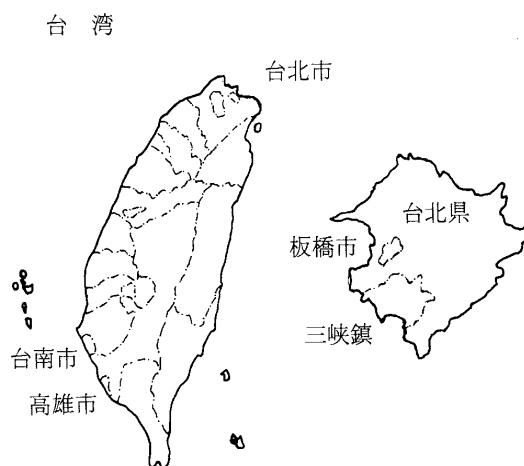


図1 調査対象地区の位置

表3 台湾における15才以上の職業別の人口 (単位: 千人%)

西 暦 別	1981	1984	1985	1986	1987	1988
総 計	5,498	6,006	6,078	6,310	6,516	6,538
農・林・漁・畜牧業	1,223	1,250	1,258	1,277	1,194	1,086
礦 業	39	59	34	32	30	27
製 造 業	1,845	2,128	2,139	2,236	2,414	2,409
水 電 燃 気 業	19	23	23	24	24	24
営 造 業	479	423	426	426	455	487
商 業	793	924	959	989	1,012	1,069
交 通 業	278	266	269	285	303	302
金融保険及び商工服務業	98	116	121	136	144	166
社会服務行および個人服務業	724	816	849	904	941	968

(『中華民国台湾省基本省政資料』より)

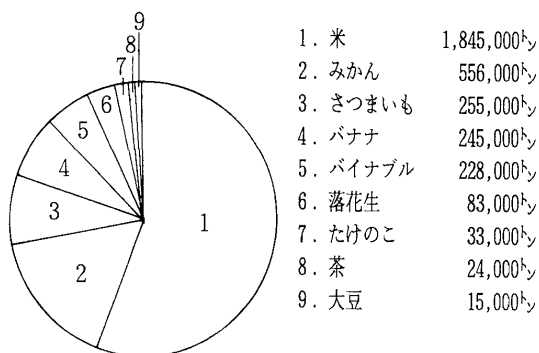


図2 台湾の主要な産物の生産高

銅)も豊富で産出量は台湾全土のトップである。

農業については平野が少なく、その上人口密度が非常に高いため米の三期作を奨励している。米以外に茶とみかんが本県の特産であるが、農業は主要な産業とはなっていない(図2)。従って農村地域の家族といっても農業に従事している人数は少ない。

板橋市は旧名「枋橋」であったが、日本時代に現代の「坂橋」に変わった。台北県の中心地であり、県庁も同市に設置されている。面積は23平方キロしかないが、人口は1972年の13万人から1987年には約51万人にと急増した地域である。同市が

台北市に隣接しているため、ベッドタウンとして急成長を遂げた地域である。なお急成長を遂げる前の同市の住民はほとんどが中国の福建省の泉州からの移住者である。

三峡鎮は旧名「三角湧」であったが、日本時代、日本語の発音と非常に似ている「三峡」に改名した。面積は約 191平方キロで台北県の中では広い方である。人口は約 5万 8千人であり、人口減少地域であるといわれている。かつては森林資源が豊富で、台湾の林業の中心であった。あわせて、木材を使った彫刻（道教の寺、屋根、室内に使われる）産業の中心地でもあった。だが、日本から解放された後、森林資源が徐々に減少し、それにつれて彫刻産業も衰退し、現在は過疎化が進行している地域となっている。

2. 調査対象校の概略

調査対象校は台北県で一番人口増加の著しい板橋市の「板橋国民小学」と、逆に人口が減少している農村地域にある三峡鎮の「民義国民小学」である。板橋国民小学は1889年に開校され、「枋寮公学校」と呼ばれたが、途中で日本人に改名された歴史をもつ。1968年に 9年制の国民義務教育を実施することになりあわせて校名を「板橋国民小学」に変更し、現在に至っている。百年の歴史があり、全国で二番目に古い小学校である。三峡の民義国民小学は1969年に開校された台湾の中でも新設校であり、歴史も20年と浅い。2つの学校の概略を表4に示した。この表4より、板橋国民小学は都市地域にある大規模校、民義国民小学は農村地域にある小規模校であることがわかる。

表4 調査対象校の概略

	板橋国民小学	民義国民小学
職員数	209	17
クラス人数	152	11
生徒数	7,619	386

3. 調査対象者の家族構成

本調査は「祖父母が同一住宅に同居しているかどうか」をたずねているため、ここでの同居とは同一棟居住をさすものである。

3-1 板橋の場合

板橋の場合を表5からみると、一般的な家族構成は「両親+子ども」の核家族であり、全体の約70%と、圧倒的多数を占めている。だが、ここに少数ではあるが、大家族制の名残りと考えられる同居人を抱える世帯がみられる。この同居人は母方の関係のものが多く、そのうちわけをみると、母方のきょうだい（姉妹も含む）の子どもというのが最も多い。ついで、母方のきょうだいとその子どもと合わせて、というのであり、さらに母の友達というものもある。

つぎに父方の関係のものがどの程度いるかをみると、4戸であり、すべて父の妹（未婚）である。この場合、祖父母は別の場所に居住しているわけだから、父の妹は親と離れて、兄の家族とともに暮らしているということになる。このとき、父の妹が親元から離れて、兄のところに移住してきたのか、祖父母が他の子どもたちのところに移住していったのかは今回の調査では確定できない。しかし後述する分析を踏まえて考えると、祖父母が他の子どもたちのところに移住していった場合が多いであろう。

表5 家族構成別家族人数(板橋)

家族人数 家族構成		家族人数																
		計	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	11人	12人	13人	14人	15人	16人	17人
計		175	—	2	45	74	29	10	7	1	3	1	1	—	—	—	—	—
三世代同居以外	両親 子ども	122	—	2	45	59	11	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	両親 子ども 同居人(母方)	9	—	—	—	4	2	2	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
	両親 子ども 同居人(父方)	4	—	—	—	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
三世代同居	(父方)祖父母 両親 子ども	29	—	—	—	10	11	4	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	(父方)祖父母 両親 子ども 同居人	7	—	—	—	—	1	—	2	—	2	1	—	—	—	—	—	—
	(父方)と(母方) 祖父母 両親 子ども	3	—	—	—	—	1	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—
不明		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—

注：22人1戸

次に三世代同居の世帯をみると、40戸あり、そこでの基本的な家族構成は、「父方の祖父母+両親+子ども」という男系三世代である。これが40戸中29戸と圧倒的多数を占めている。このタイプを基本としつつ、両親の父方の男兄弟の家族が同居する場合がある。だが、この同居家族の中には2単位以上の若夫婦（調査対象者の両親とおじ夫婦のこと）はみられないという特徴がある。きょうだい5～6人という一般例から考えると、2家族以外の家族は同居していないわけだから一定の世帯分離が生じているといえる。その要因は住居の規模や仕事の有無ではないかと思えるが今回の調査では実証できない。さて、「祖父母+両親+子ども+同居人」のタイプは7戸みられたが、そのうちの1戸は両親の女きょうだいの家族との同居である。すなわち、ここでは男系三世代の崩壊がみられる。

少数例として、母方の親と住みつつ、父方のきょうだいと同居する、両親の両方の祖父母と一緒に住むなどがみられた。これは、日本のむこ養子という結婚のスタイルというより、力のある両親が、祖父母を扶養するという考え方のあらわれではないかと思える。公務員と一部の大企業の社員を除くと、老後の年金制度のない台湾では、子どもに扶養してもらいながら老後を過ごすのが一般的である。そこでは、長男と同居するというスタイルは少なく、男子の力のある家族と同居する

表6 家族構成別家族人数（三峡）

家族人数 家族構成		家族人数																
		計	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	11人	12人	13人	14人	15人	16人	17人
計		69	1	—	2	7	16	12	7	10	1	3	2	1	2	1	2	—
三 世 代 同 居 以 外	両親 子ども	27	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
	両親 子ども 同居人（母方）	2	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
	両親 子ども 同居人（父方）	2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
三 世 代 同 居	（父方）祖父母 両親 子ども	26	—	—	1	2	5	5	5	6	1	1	—	—	—	—	—	—
	（父方）祖父母 両親 子ども 同居人	9	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	2	1	2	1	1	—
	（父方）と（母方） 祖父母 両親 子ども	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
不 明		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(22人1戸)				—

注：22人1戸、23人1戸

か、どうしても力のある男子がない場合は、女子の家族と同居するというルールが形成されていると考えられる。

なお、三世代同居40戸のうち、両親が長男夫婦である場合は7戸にすぎない。男系であるが、直系ではないといえよう。

なお前者の家族人数は5人から7人にピークを持つが、後者の場合は、5人から8人位にまで増えることがわかる。そして全体的に、家族人数が多い世帯が主流である。

3-2 三峡の場合

表6より、都市にある板橋に比べ、農村にある三峡は三世代同居と三世代同居以外がほぼ同じ位であり、相対的に三世代同居が多いことがわかる。

まず三世代同居以外の場合の一般的な家族構成をみると「両親+子ども」であり、これに同居人を抱えている場合が4戸ある。この同居人は父方が2戸、母方が2戸となっている。うちわけは父方の場合、未婚の弟と結婚した弟家族であり、母方の場合、母の兄家族と未婚の兄の場合である。このように成長した子どもが家族を形成しても世帯分離を行っていない。すなわち、大家族制の名残りが少数みられる。

なおこの場合の両親が長男夫婦かどうかを検討すると、13戸が長男夫婦、不明が2戸、残りの16戸が長男以外の夫婦であった。祖父母は健在な世帯が対象であることから考えると、約半数の長男夫婦が祖父母と同居していないわけであり、農村地域にある、三峡においても必ずしも長男と同居するというルールがないことがわかる。

つぎに三世代同居の場合の一般的な家族構成をみると「父方の祖父母+両親+子ども」という男系三世代であり、これが多数を占めている。そしてこれを基本としつつ父方の同居人を持つ例が9戸存在する。なお同居人は男の兄弟夫婦とその子どもであるが、ここでも2単位以上の若夫婦はみられない。さて同居人が母方の場合のみという場合はないが、両方の祖父母と一緒に住む世帯が2戸みられた。農村においては、同居人は、まず父方である（すなわち男系が強い）ことがわかる。この要因は、農地などの生産手段が家業として男系で伝わっていくことにあるためと思われる。

なお、両親が長男夫婦の場合は14戸、不明2戸、長男以外が20戸となっており、ここにも長男と同居するという傾向が必ずしもみられないことがわかる。

4. 居住の形態と特徴

4-1 居住の形態

アンケート調査では居住形態を大きく二つに分けた。一つは三世代同居、すなわち、祖父母と両親と子どもという三世代が同一棟で暮らしているタイプである。もう一つは三世代同居以外のタイプである。すなわち、祖父母は両親の他のきょうだいと暮らしているか、祖父母だけでくらしている場合である。本稿はこの二つに分けて特徴をみていく。

4-2 三世代同居世帯の祖父母について

ここでは祖父母を対象に、職業、過ごし方及び専用室の有無と設備、さらに都市と農村の相違点を分析する。

4-2-1 三世代同居世帯での祖父母の職業

表7より、板橋における祖父母二人とも健在な場合は40戸の中で21戸、どちらか一方が亡くなったのは19戸である。さて、表7より、二人とも健在で二人とも職業を持っているのは2戸であり、

表7 祖父母の職業 (板橋)

世帯番号	祖父	祖母	世帯番号	祖父	祖母	世帯番号	祖父	祖母	世帯番号	祖父	祖母
1	×	-	11	×	-	21	-	-	31	公務員	-
2	-	-	12	不明	-	22	-	-	32	農業	-
3	×	-	13	-	×	23	×	-	33	商業	-
4	×	-	14	-	×	24	×	-	34	公務員	-
5	-	×	15	-	-	25	-	×	35	-	-
6	-	×	16	-	-	26	商業	-	36	農業	-
7	-	-	17	×	-	27	-	-	37	公務員	-
8	×	-	18	-	-	28	商業	商業	38	×	-
9	農業	農業	19	×	-	29	公務員	-	39	×	農業
10	-	×	20	-	×	30	農業	-	40	無回答	無回答

亡くなった：×

職業なし：-

表8 祖父母の職業 (三峡)

世帯番号	祖父	祖母	世帯番号	祖父	祖母	世帯番号	祖父	祖母	世帯番号	祖父	祖母
1	商業	商業	11	商業	商業	21	×	—	31	×	工場
2	×	無回答	12	管理員	—	22	—	無回答	32	農業	洋裁
3	商業	商業	13	×	—	23	内職	内職	33	無回答	—
4	×	—	14	農業	—	24	×	—	34	×	—
5	—	—	15	商業	×	25	管理員	—	35	×	無回答
6	—	×	16	—	—	26	農業	—	36	—	—
7	不明	—	17	×	洋裁	27	—	—	37	無回答	無回答
8	不明	不明	18	×	—	28	商業	彫刻	38	×	無回答
9	—	—	19	農業	農業	29	—	×			
10	農業	—	20	×	—	30	×	—			

亡くなった：×

職業なし：—

内容は農業か商売，いわば家業の場合である。二人とも持っていないのは9戸，どちらかが持っているのも9戸である。なお，どちらかが持っているのは殆んどが祖父であり，内容は公務員か農業である。

つぎに，三峡の場合はどうか。表8より，祖父母二人とも健在な場合と片方が亡くなった場合とがほぼ半数ずつを占めている。表8より，二人とも健在の19戸の中では，二人とも職業を持っているのは7戸で内容は商売が多い。二人とも持っていないのは5戸，どちらか一方が持っているのは5戸，持っているのはほとんどが祖父であり，内容は農業か管理員である。どちらか一方が健在の19戸の中で職業をもっているのは3戸しかなく，内容は洋裁，商業，工場づとめなどに分散している。なお，持っていないのは10戸である。職業の内容を全体的にみても，商売が一番多く，次は農業，管理員，内職や家庭洋裁などであり，自営業や家業に近いものが大半であることがわかる。

以上の分析から2点が理解できた。1点は板橋の老人は職業を持っている比率が三峡より低く，言い換えれば，農村の老人の方がよく働いているという事である。もう1点は板橋でも三峡でも老人の職業の内容はあまり大きな差がみられないという事である。

4-2-2 祖父母の過ごし方

まず板橋からみてみよう。表9より，祖父の方は将棋をするのが一番多く，ジョギングと運動や散歩が同じく9戸あり，そして音楽を聴くのが4戸である。祖母の方はジョギングが一番多く，ついでテレビを見ること，カラオケなどである。健康に留意した過ごし方が多いことがわかる。

次に三峡での過ごし方はどうか。表10からみてみると，無回答数が幾分多かったが，祖父の方はジョギングが一番多く，そして運動や散歩，花に水をやることであり，祖母の方は祖父と少し違い，ジョギング，運動や散歩，隣人とおしゃべりの順になっている。ここでも健康志向が強いといえる。

では，この2地域を比較してみよう。共通点としては板橋の祖父母でも，三峡の祖父母でも，健康に良い運動や散歩などの過ごし方の比率が高いことである。相違点としてはまず板橋の老人が一

表9 祖父母の仕事以外の時間の過ごし方（板橋）

世帯番号	過ごし方	カラオケ	ジョギング	隣人とおしゃべり	運動や散歩	花に水をやる	テレビを見る	音楽を聴く	買物	将棋	ダンス	その他	なし
計		6	21	1	14	5	8	5	1	14	3	6	1
1				○									
2			△				○						
3			○										
4					○		○						
5					△			△					
6					△								
7							△		○			△	
8			○										
9			△○							△	○		
10							△	△					
11			○										
12			○										
13										△			
14												△	
15			△○										
16										△○			
17			○										
18		△○	△			○				△○			
19												○	
20			△		△								
21						○				△			
22			△○		△								
23					○		○						
24						△							
25					△								
26					△○	△○					△○		
27		○	△				○			△			
28			○							△			
29		○			△			△					
30					△○								
31					△○					△			
32										△○			
33			○							△			
34			△○										○
35			△										
36			○							△			
37		△○					△○	△○					
38												○	
39												○	
40												△	

祖父：△ 祖母：○

表10 祖父母の仕事以外の時間の過ごし方（三峽）

世帯番号	過ごし方	カラオケ	ジョギング	隣人とおしゃべり	運動や散歩	花に水をやる	テレビを見る	音楽を聴く	買物	将棋	ダンス	その他	なし
計		2	13	6	9	5	2	—	—	1	—	22	8
1		△○											
2												○	
3			△									○	
4													
5			○										○
6			△										△
7												△○	
8												△○	
9												△○	
10				△○	△	○							
11			△									○	
12						△							
13												○	○
14				○	○								△
15										△			
16													△○
17						○							
18												○	
19			△○										
20												○	
21												○	
22												△○	
23			△○		△○								
24												○	
25						△						○	
26													△○
27				△○			△○						
28			△○		○								
29					△								
30			○		○								
31													
32			△○										
33					△○								
34												○	
35												○	
36				○		△							
37												△○	
38												○	

祖父：△ 祖母：○

表11 老人専用室の所有状況

専用室有無	計	板橋	三峽
計	78(100.0)	40(100.0)	38(100.0)
ある	67 (85.9)	37 (92.5)	30 (78.9)
なし	10 (12.8)	2 (5.0)	8 (21.1)
無回答	1 (1.3)	1 (2.5)	—

番よくする将棋は三峽であまりないことである。台湾では、将棋は一定の人数が必要なため、施設でやるのが一般的である。そのた施設の整った、かつ仕事をしている老人の少ない都市で多く行なわれているのである。一方、三峽の祖父母を合わせて5戸ある隣人とおしゃべりという過ごし方は、板橋では1戸しかない。ここに都市と農村の人間関係の違いが表われているといえる。

4-2-3 老人専用室の所有状況

表11より、板橋で老人専用室を持っているのは40戸の中で37戸と圧倒的に多い。三峽の場合は38戸の中で30戸が持っており、板橋よりも幾分持っている率が下がるが、やはり多いといえる。このように老人専用室は非常に所有状況が高く、なかでも都市においては際立っていることがわかる。

なお、老人専用室を持たない場合の老人の就寝場所については不明である。

4-2-4 老人専用室の設備

今回の調査では老人専用室の設備について、プレ調査を参考にして表12のような項目を設定した。板橋でベッドが置いてあるのは37戸と100%を占めており、机が置いてあるのは35戸、タンスの方はベッドと同じ100%である。この三つが老人専用室の基本的設備といえよう。特にベッドが多いのは起居様式がイスザであることの反映である。ただし、部屋のドアを開けたところに履き物をぬぎ、30cm~50cm程高い所に床を張って、その床上に布団を敷く様式（台湾では坑床と呼ばれる）か、現代のベッドかについては確定できない。

台所の設置は皆無であり、食の分離がみられないことがわかる。食の分離がないという事は経済的な分離もあまりないと考えられよう。ただし冷蔵庫の設置がわずかだがみられる。

つづいて生活行為のプライバシー度を反映するバス・トイレの設置をみると9戸、24.3%である。老人空間の分離は就寝室が確保されると、次にバス・トイレに進み、台所には進みにくいことがわかる。

又、老人専用室が寝るためだけの空間ではなく、だんらんや休息など多目的に使われているかどうかをテレビ、電話、ソファなどの設置からみると、およそ30%が多目的に使用されていることがわかる。なおバス・トイレ、テレビ、電話、冷蔵庫、ソファには一定の相関がみられる。つまり、バス・トイレのある世帯は他の設備も整っている確率が高いのである。すなわち、約30%の世帯で、経済力を必要とする食の分離は無理であるが、若夫婦との生活行為の分離を達成していることがわかる。

つづいて三峽を表13からみてみよう。

ここでもベッド、机、タンスが基本的な設備と考えてよいだろう。

その他の項目をみると、二つの特徴がみられる。一つは台所が3戸の世帯で設置されていることである。実際に利用されているかどうかの質問は行なっていないが、一応、食の分離があると考えられよう。もう一つの特徴は全体的に農村の方が設備の所有率が低いという事である。なお、台所

表12 老人専用室における設備（板橋）

設備 世帯番号	ベ ッ ト	机	タ ン ス	台 所	バス・ トイレ	テ レ ビ	電 話	冷 蔵 庫	ソ フ ァ	洗 濯 機
1	○	○	○							
2	○	○	○		○	○	○	○	○	
3	○	○	○						○	
4	○	○	○							
5	○	○	○							
6	○	○	○			○				
7	○	○	○			○	○	○		
8	○	○	○							
9	○	○	○		○	○	○		○	
10	○	○	○						○	
11	○	○	○				○			
12	○		○		○	○	○			
13	○	○	○							
14	○	○	○						○	
15	○	○	○						○	
16	○	○	○							
17	○	○	○							
18	○	○	○		○					
19	○		○							
20	○	○	○							
21	○	○	○		○	○	○	○	○	
22	○	○	○				○			
23	○	○	○						○	
24	○	○	○			○				
25	○	○	○				○			
26	○	○	○				○			
27	○	○	○		○		○		○	
28	○	○	○			○				
29	○	○	○						○	
30	○	○	○							
31	○	○	○		○	○			○	
32	○	○	○		○	○	○			
33	○	○	○							
34	○	○	○				○			
35	○	○	○			○	○		○	
36	○	○	○		○					
37	○	○	○				○			
38	○	○	○							

注：バス・トイレは一室内にあることが一般的

表13 老人専用室における設備（三峡）

設備 世帯番号	ベ ッ ト	机	タ ン ス	台 所	バス・ トイレ	テ レ ビ	電 話	冷 蔵 庫	ソ フ ア	洗 濯 機
1	○	○	○			○				
2	○		○							
3	○	○	○							
4	○	○	○							
5	○	○	○							
6	○		○							
7	○	○	○			○	○		○	
8	○	○	○							
9	○		○							
10	○		○							
11	○	○	○							
12	○	○	○							
13	○	○	○							
14	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
15	○	○	○							
16	○	○				○		○		
17	○	○								
18	○		○							
19	○	○	○							
20	○									
21	○	○	○						○	
22	○		○	○	○		○	○		
23	○		○			○		○		
24	○	○	○							
25	○	○	○			○			○	
26	○		○						○	
27	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
28	○	○	○			○				
29	○		○							
38	○		○							

注：バス・トイレは一室内にあることが一般的

表14 三世同居以外の居住形態

居住形態	計	板橋	三 峡
計	166(100.0)	135(100.0)	31(100.0)
近くに親戚と同居	64 (38.6)	42 (31.1)	22 (71.0)
離れて、親戚と同居	66 (39.8)	59 (43.7)	7 (22.6)
離れて、祖父母二人暮らし	28 (16.9)	26 (19.3)	2 (6.4)

注：この他に、別の場所に住むが、子ども達のところを訪問してはしばらく泊るという場合が板橋に8戸みられる

注：離れているところとは居住場所以外の県・市を指すもの

とバス・トイレのある世帯では他の設備の所有状況も高い傾向があり、設備の整った、すなわち自立性の高い多目的な専用老人室がわずかだがみられることがわかる。

4-3 三世同居以外の世帯の特徴

表14より、全体的にみると祖父母が他の県や市に住んでいる場合が最も多い。なお他の県や市に住む祖父母は他の子どもや親戚と同居している場合が一般的であるが、老人だけで住む場合もみられる。ついで多いのは、祖父母が同一市内に住んでいる場合である。なお少数だが他の場所に住んでいるが時々やってきてはしばらく泊るという例がみられた。

三峡は祖父母が同一町内に住んでいる場合が圧倒的に多く、ついで他の県や市に離れて住んでいる場合である。なお他の県や市に老人だけで住むという例はきわめて少ない。

都市にある板橋では祖父母と離れて住む場合が多いが農村にある三峡ではほとんどないことが両地域の差である。

4-3-1 三世同居以外（近くに住んでいる）での祖父母の居住地までの距離

調査対象 244名の中で64名の祖父母が近くに住んでいる。ここでは居住地までの距離をみてみよう。表15より、板橋では歩いて30分以内が最も多く（42戸の中で11戸）、ついで10分以内（10戸）、10～20分以内（9戸）、2,3分以内（6戸）とつづき、最も少ないのは30分以上の場合である。このようにきわめて近いところに祖父母が住んでいることがわかる。三峡では歩いて2,3分以内が最も多く（22戸の中で8戸）、ついで30分以内（7戸）、10分以内（5戸）とつづき、10～20分以内と30分以上の例はない。近くに住んでいる場合はきわめて近いことがわかる。

4-3-2 三世同居以外（近くに住んでいる）での祖父母の訪問頻度

表15 三世同居以外（近くに住んでいる）での祖父母の居住地までの距離

居住距離	計	板橋	三 峡
計	64	42	22
2,3分以内	14	6	8
10分以内	15	10	5
10～20分以内	9	9	—
30分以内	18	11	7
30分以上	3	3	—
無回答	5	3	2

表16 三世代同居以外（近くに住んでいる）での祖父母の訪問頻度

訪問頻度	計	板 橋	三 峡
計	64	42	22
毎日来る	8	5	3
週に 2,3回来る	17	9	8
週に 1 回来る	8	3	5
月に 1 回来る	11	10	1
ほとんど来ない	14	11	3
無回答	6	4	2

ここでは近くに住んでいる祖父母が若夫婦の家を訪問する頻度をみてみよう。表16より、板橋では近くに住んでいるのにほとんど来ないのが最も多く（11戸）、ついで月に1回（10戸）、週に2,3回（9戸）、毎日来る（5戸）、週に1回（3戸）である。近いにもかかわらず訪問の頻度は比較的少ないことがわかる。それに対して、三峡では週に2,3回の場合が最も多く（8戸）、ついで週に1回（5戸）、毎日来るとほとんど来ない場合が同じ（3戸）、月に1回（1戸）である。比較的訪問の頻度が多いことがわかる。

以上より、三峡の祖父母は板橋の場合より訪問頻度が多い。だが毎日来るのは両地域とも少ない方に属し、週に2,3回来るといふ傾向がみられるようである。

4-3-3 三世代同居以外（しばらく泊る）の場合の祖父母の宿泊期間と就寝場所

このタイプは今回の調査では一番少なく、板橋でただ8戸あるのみである。なお、三峡では1戸もない。ではまず、祖父母の宿泊期間からみてみよう。表17より、8戸の中で一週間くらい泊るの

表17 三世代同居以外（しばらく泊る）での祖父母の宿泊期間

泊まる期間	計	板 橋	三 峡
計	8	8	—
一週間くらい	3	3	—
半か月くらい	2	2	—
一か月くらい	2	2	—
二か月くらい	—	—	—
三か月以上	1	1	—
無 回 答	—	—	—

表18 三世代同居以外（しばらく泊る）での祖父母の就寝場所

就寝場所	計	板 橋	三 峡
計	8	8	—
専 用 室	6	6	—
応 接 間	—	—	—
家 族 と 一 緒	1	1	—
無 回 答	1	1	—

は3戸，半月くらい泊るのは2戸，1ヶ月くらい泊るのも2戸，2ヶ月くらい泊るのは無し，3ヶ月以上は1戸である．遊びに来る程度の宿泊頻度が半分強，長期間宿泊し，おそらく家族の一員のように生活する例が半分弱となっている．

次には祖父母の就寝場所をみてみよう．表18より，老人専用室で寝るのは6戸，応接間で寝るのはなく，家族と一緒に寝るのは1戸，無回答が1戸である．宿泊期間の長短にかかわらず老人専用室を確保している場合が一般的であることがわかる．

4-3-4 三世代同居以外（離れて親戚と同居）の場合の祖父母の居住場所

表19より，板橋の59戸の中では他県市で居住するのが大部分を占めている（52戸），すなわち調査対象者の両親は，老人を他県市に残したまま，仕事を求めて移住してきたのである．本県市内に居住するのは6戸，本町内に居住するのは1戸である．三峡の7戸では6戸が他県市，1戸が本県市内，本町内はない．他県市の場合が多いことがわかる．

表19 三世代同居以外（離れて、親戚と同居）での祖父母の居住場所

居住場所	計	板橋	三峡
計	66	59	7
本里内	1	1	—
本県・市内	7	6	1
他県・市	58	52	6

表20 祖父母二人暮らしでの居住場所、若夫婦と合う頻度及び時期

世帯番号	居住場所	合う頻度	合う時期
1	宣蘭	約30回	ABC
2	三峡	約10何回	ABCD
3	楊梅	1回	不明
4	桃園	2回	BD
5	新竹	よく合う	ABCDE
6	新竹	約20回	E
7	彰化	3回	BCD
8	彰化	3～4回	BCD
9	彰化	7回	BCDE
10	南投	2回	BD
11	嘉義	3～4回	E
12	嘉義	2～4回	BCD
13	嘉義	5回	BCD
14	嘉義	3～4回	BCDE
15	高雄市	4回	BCD
16	不明	4回	ACE
17	不明	約30回	ABC
18	不明	1～2回	ABCD
19	不明	1回	ABCD
20	不明	4回	DE
21	ワシントン	決まっていない	帰国するとき
22	板橋	1回	D
23	彰化	10～20回	ABCDE

注：板橋の場合 無回答が5例がある A：春休み

B：夏休み C：冬休み D：お正月 E：その他

4-3-5 三世代同居以外（離れて祖父母二人暮らし）の場合の居住場所と若夫婦と会う頻度

表20より、このタイプは、全28戸の中で板橋の場合が26戸、三峽の場合はわずか2戸である。居住場所の分布は図3のようになる。これからみると、居住場所の遠近と会う頻度の相関はみられない。会う時期をみてみると、大体子どもの休みと合せる傾向があり、最も長期間の夏休みに会う例が一番多い。ついでお正月である。このように子どもの休みを利用して、祖父母との交流を計っている。

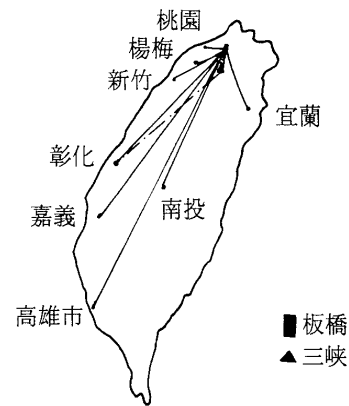


図3 老人居住場所の分布

5. 同居に関する意見

今回の調査では同居に関する意見について、二つの設問をした。一つは祖父母と一緒に住むことをどう思うか。これに対する答えは表21のように5つある。もう一つは将来結婚したとしたら両親と一緒に住むかであり、これに対する答えは表24のように6つある。なおこの設問はクラス全員を調査対象にしているため板橋 198名、三峽は90名の合計 288名である。

表21 同居に関する意見

意見	計	板橋	三峽
計	288(100.0)	198(100.0)	90(100.0)
いいと思う	158 (54.9)	106 (53.5)	52 (57.8)
まあまあいいと思う	43 (14.9)	33 (16.7)	10 (11.1)
どちらでもいい	66 (22.9)	49 (24.7)	17 (18.9)
ややいやだと思う	11 (3.8)	8 (4.0)	3 (3.3)
いやだと思う	2 (0.7)	1 (0.5)	1 (1.1)
無回答	8 (2.8)	1 (0.5)	7 (7.8)

表22 居住形態別にみた同居に関する意見（板橋）

意見	計	I	II	III
計	198(100.0)	40(100.0)	135(100.0)	23(100.0)
いいと思う	106 (53.5)	26 (65.0)	70 (51.9)	10 (43.5)
まあまあいいと思う	33 (16.7)	8 (20.0)	21 (15.6)	4 (17.4)
どちらでもいい	49 (24.7)	1 (2.5)	41 (30.49)	7 (30.4)
ややいやだと思う	8 (4.0)	3 (7.5)	3 (2.2)	2 (8.7)
いやだと思う	1 (0.5)	1 (2.5)	—	—
無回答	1 (0.5)	1 (2.5)	—	—

I：三世代同居

II：三世代同居以外

III：祖父母死亡

表23 居住形態別にみた同居に関する意見（三峽）

意見	計	I	II	III
計	90(100.0)	38(100.0)	31(100.0)	21(100.0)
いいと思う	52 (57.8)	21 (55.3)	22 (71.0)	9 (42.9)
まあまあいいと思う	10 (11.1)	9 (23.7)	1 (3.2)	—
どちらでもいい	17 (18.9)	5 (13.2)	5 (16.1)	7 (33.3)
ややいやだと思う	3 (3.3)	1 (2.6)	2 (6.5)	—
いやだと思う	1 (1.1)	1 (2.6)	—	—
無回答	7 (7.8)	1 (2.6)	1 (3.2)	5 (23.8)

I：三世代同居

II：三世代同居以外

III：祖父母死亡

表24 対象者の結婚後の計画

結婚後の予定	計	板橋	三峽
計	288(100.0)	198(100.0)	90(100.0)
絶対一緒に住む	107 (37.2)	76 (38.4)	31 (34.4)
ほかの兄弟と一緒に住んで欲しい	19 (6.6)	3 (1.5)	16 (17.8)
別に意見がない	92 (31.9)	76 (38.4)	16 (17.8)
別居する方がいい	8 (2.8)	6 (3.0)	2 (2.2)
絶対一緒に住まない	2 (0.7)	2 (1.0)	—
分からない	60 (20.8)	35 (17.7)	25 (27.8)

全体で見れば、表21の示すようにいいと思うものが54.9%を占めており、同居に対する賛成意見が多いことがわかる。なお、ややいやだと思うのは3.8%、一番低いのはいやだと思うでわずか0.7%である。又、地域別にみると板橋よりも幾分三峽の方が賛成意見が多い。

つぎに、居住形態からみてみよう。表22と23より、居住形態による差はほとんどみられないといえよう。わずかの差だが、注目すべき点は実際に祖父母と同居している場合に同居賛成意見が強いという点である。このような点から三世代同居そのものはあまり問題視されていないと考えられる。

さて、実際に自分が結婚したとしたら同居をどう考えるかをみるために結婚後の同居計画についてみてみよう。表24より、分からないと答えた人数が多いが（全体で20.8%）、これを除いて37.2%の生徒が将来絶対一緒に住む、31.9%が別に意見がない、別居したいのはわずか2.8%であり、ほかのきょうだいと一緒に住んでほしいのは6.6%、そして絶対一緒に住まないのは0.7%にすぎない。以上のことからみてみると、子どもの意識の中で親と同居することは自分の責任であるという考え方が強くあることがわかる。

結 論

台湾における三世帯同居世帯の特徴点をまとめると以下のようになる。

まず家族構成であるが、板橋すなわち都市では核家族が中心であり、三峡すなわち農村では三世帯同居と核家族が半々位の割合となっている。つまり、都市の方が核家族化が進んでいることがわかった。

さらに具体的な家族構成は都市では「両親＋子ども」であるが、農村ではさらに祖父母が加わる。

家族構成における特徴点をみると、第1に祖父母と同居している子どもは殆んど男子であること。しかし長男であることにはあまりこだわらず、むしろ比較的経済力のある子どもと同居する傾向が強いことである。これは年金制度がないため老後は経済的に子どもに頼らざるをえないことから経済力のある子どもと同居するというルールが生れてきたものと思われる。第2の特徴点は、大家族制の名残りを少数例だが残しており、同居人が多く子ども数も比較的多い。このため家族人数が10人を越える世帯が約10%も存在している。

同居のスタイルは食事、経済、居住棟ともに同一の、いわゆる完全同居が一般的である。この傾向は都市も農村もかわらない。

同居の祖父母の職業をみると、持っているが約30%位で、一定の年齢になると仕事から離れ、子どもの経済的援助下に入ると考えてよい。また都市や農村を問わず、職業を持っているのは商売、農業などの家業の場合が多い。又都市より農村の方がよく働いている。仕事をしていない老人は健康に留意した生活をしながら過ごしている。

住居全体の間取りや規模は調査してないが老人専用室の所有状況は際立って高い。設備はベッド、机、タンスが基本的なものとして配置され、比較的トイレ、風呂の設備も多い。しかし台所はほとんどがみられなかった。食の分離はほとんどないことがわかる。この点からも完全同居が一般的であるといえる。

次に同居していない祖父母の居住地をみると都市では比較的遠くに、農村ではすぐ近くに住んでいることがわかる。そのような祖父母とは子どもの休みを利用して年に2～3回会っている。

同居に関する意見をまとめると都市と農村、現在同居しているかどうか、などに関係なく全般的に賛成意見が強い。調査対象の子ども達も将来結婚したら同居しようと計画している場合が多い。同居は一般的な居住形態であり、しかも現状からすると完全同居が一般的だと考えられていることが明らかである。

謝辞 当調査に協力していただいた板橋国民小学と民義国民小学の生徒達、先生方、とりわけ頼木通先生に深く感謝します。

参 考 文 献

- 1) 中華民国76年台湾地区青少年及老人状況調査報告分析
- 2) 我的家郷台北県・台北県政府編印(1986年4月)
- 3) 小川正光：老人世帯・三世帯世帯の住宅事情・日本建築学会学術講演梗概集(九州)、p 2033～2044、

- (1981).
- 4) 相島裕子・湯川利和：老人の同居観に関する研究・日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）， p 1099～1100， (1979).
 - 5) 佐藤平・松井寿則・増田豊文：三世代同居住宅の建築計画に関する研究・日本建築学会学術講演梗概集（関東）， p 1181～1182， (1984).
 - 6) 高阪謙次：ひとり暮らし老人向き住宅・居住施設の空間・配置計画上の論点・日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）， p 1333～1334， (1978).
 - 7) 鈴木晃：独居老人の住宅と生活に関する研究・日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）， p 2033～2044， (1981).
 - 8) 本間博文：三世代同居家族の住宅画に関する基礎的研究（第1報）・日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）， p 61～62， (1988).
 - 9) 中華民国台湾省基本省政資料・台湾省政府新聞處編印（1989）
 - 10) 歌我板橋・板橋市公所（1990年2月）
 - 11) 粗枝大葉話三峡・三峡鎮公所（1990年1月）
 - 12) 板橋国民小学校務概況
 - 13) 民義兒童（慶祝建校20周年特刊）（1989年6月）

（1990年5月21日 受理）